

## はじめに

本書の目的は、北米の日本語教育で有名なジョーデンメソッドを援用し、さらに最新技術である ChatGPT などの AI を効果的に使う形で、英語の 4 スキルの習得前提のカリキュラム（クラス活動など）、評価法を具体的に示すことです。ジョーデンメソッドは、日本語教育の世界では知る人ぞ知るの著名な教授法で、典型的な習得教育であり非常に大きな成果を上げています。例えば、作家の村上春樹氏は、アメリカの大学で日本文学を教えたことがあります。学生たちには 3 年ほどのジョーデンメソッドでの日本語履修経験があり、「教職員も生徒もだいたいみんな流暢な日本語を喋る。僕なんか喋る英語なんかよりもはるかに流暢」（エッセイ『やがて哀しき外国語』）で、**氏の日本文学のクラスでの議論は日本語で行われていました。**

日本の英語教育はなかなか習得教育へと移行さえできないままです。2023 年に中学 3 年生を対象に全国学力テストで英語のスピーキング力調査が 4 年ぶりに行われ、平均点がなんとわずか 12.4/100 点という結果でした。ゼロ点が全受験者の 3 分の 2 弱もいたという、「落ちこぼれ」の言葉が生やさしく感じるほどの現状です。前回のスピーキングのスコアは 30.8/100 点でしたので、日本の英語教育は習得教育へ向かうどころか逆に後退していつている感じがします。

海外の英語教育はとっくの昔に語彙—文法—読解中心の「紹介型」英語教育から脱し、グローバリゼーションにおける大きな時代の変化の流れに乗って、4 スキルの「習得型」へ脱皮しています。例えば、台湾では高校 3 年生段階での英語力は CEFR B2 レベル（TOEFL iBT 80 レベル、英検で準 1 級レベル）以上の生徒が 21.4%、CEFR C1 レベル、つまり TOEFL iBT 100 レベル、英検 1 級レベル以上の生徒も 4.3% もおり、中学 3 年生でさえ CEFR B2 レベル超えは 6.5% もいます（British Council との共同調査『2030 バイリンガル政策全体推進プログラム』）。韓国も中国も似たような習得レベルでしょう。一方、日本では CEFR B2（英検準 1 級レベル）超えの高校 3 年生は 0.4% 以下で、B1（英検 2 級レベル）だと 3% 前後です。6 段階中最も低い A1 のカテゴリに入る（英検では 3 級レベル以下）生徒はなんと 7 割以上もいる状況です。

この日本の英語教育が抱え続ける古くて新しい問題に対して、英語圏での日本語教育で圧倒的に成功しているジョーデンメソッドを少しでも参考にしていただきたいと思い『米国の日本語教育に学ぶ新英語教育』（大学教育出版）を出版しましたが、この本を根本的に書き換えなければならない画期的なことが2023年に起こりました。英語の習得教育へ大きな変化をもたらすかもしれないChatGPTなどのAIの登場です。

ChatGPTなどのAIは実に大きな可能性を秘めています。クイズを一瞬（日本語、英語両言語が可能）で作ってもらえ（教科書などの英文を文字起こしする方法：付録：I-1. 参照）、クイズの答えは、①日本語で書いて答えてもらえば読解のクイズですし、②英語のスピーキングにて答えてもらえばよりスピーキングのクイズとなります。また、③AIのリアルな英語の音声で読み上げさせれば、リスニングのクイズとしても使えます。④単語クイズ、⑤文法のクイズも、ChatGPTにしかるべくプロンプトで指定すれば一瞬で作れてしまいます。⑥小学校5、6年で導入された語彙の範囲内の英語での物語を一瞬で作らせることもできます（付録：I-2. 参照）。⑦スピーキングのクイズ/テスト作り、運用さえ可能で、⑧ある程度の英語会話力がつけば、ChatGPTとのかなり自然なフリートークでさえ可能になってきており、その会話は文字として記録に残るので復習も可能です（付録：I-3. 参照）。さらに、⑨端末で先生と生徒たちがつながっていれば、クイズの後にその結果も即座に統計が取れて、問題があった箇所をすぐにクラスでカバーすることも可能になっています。

CAN-DO リストはCEFRの影響で日本の英語教育界でも作られ始めましたが、しかるべき「仕掛け」があまり無いために、CAN-DO リストと現実との開きがあまりにも大きくなり、かなりリアリティーに欠けてしまっている感じがします。言語プログラムでは「目標⇨カリキュラム（クラス活動・宿題など）⇨評価」は三位一体ですが、生徒たちの実力とクラスやテストで扱う英語に乖離があればあるほど、教育効果は低くなるようになっています。

日々進化しつつあるChatGPTをはじめとしたAIの援用で、教科書でカバー

している範囲の英語の語彙と文法理解をベースに、効率的なアプローチで練習し、それを評価しつつプログラムを運営する習得教育へ移行できる「仕掛け」作りが容易になりつつあります。つまり、ジョーデンメソッド援用法でのやり方のパターンさえ知っていれば、効果的な「仕掛け」としてのエクササイズ、クイズやテストを教育現場で手作りするのそれほど難しいことはありません。

学校によって英語教育環境はさまざまですが、実用英語教育への転換に向かって本書『ジョーデンメソッドによる英語教育 with ChatGPT』を少しでも参考にいただければ幸いです。そして、とっくの昔に4スキルの英語の習得教育への脱皮を果たしている近隣諸国の英語力に追いつけるのみならず、追い越して、はるかに先に行けるポテンシャルをこの教授法は持っていると確信しています。



## ジョーデンメソッドによる英語教育 with ChatGPT

---

### 目次

はじめに ……1

## 第1章 言語プログラムの3要素と話技能の役割

- I 英語教育の3要素 ……13
- II スピーキングスキルは他のスキルを支えている ……13
  - 1. リスニングとスピーキングとの関係 ……13
  - 2. リーディングとスピーキングとの関係 ……14
  - 3. ライティングとスピーキングとの関係 ……16
  - 4. 文法とスピーキングとの関係 ……17
- III 教科書のスピーキングの扱い方 ……17

## 第2章 ジョーデンメソッド援用法+ ChatGPT による中学英語教育

- I クラス外での言語活動 ……19
  - 1. しっかりした文法の説明 ……19
  - 2. 英語会話の練習・暗記 ……29
  - 3. サブスティチューションドリル ……32
- II 英語のドリルのセッション ……33
  - 1. ドリルのセッションのレイアウト ……33
  - 2. 生徒へのあて方 ……35
  - 3. クラスルームインストラクション導入にTPRを使用 ……36
  - 4. クラスでのコミュニケーション活動パターン ……37
    - (1) 状況ベースの口頭での瞬間英作 ……37
    - (2) リーディングの内容について英語でディスカッション ……39
  - 5. 英語コミュニケーション活動時の先生の3つの役割 ……41
    - (1) クラスルームマネージャー ……42
    - (2) カンパセーションパートナー ……42
    - (3) モデル ……43

III 文法のセッション+クイズ	44
1. 文法のセッションの内容	45
2. 文法のクイズ	47
3. リーディングのクイズ / リスニングのクイズ	50
4. ライティングのクイズ	50
IV 評価法 (デイリーグレード、中間、期末テスト)	51
1. デイリーグレード	51
(1) 成績記録表	52
(2) 週間成績レポート	53
2. 中間・期末テスト	54
(1) スピーキングのテスト	54
(2) ペーパーテスト	54
(3) テストレポート	56
V 週間スケジュール	57
VI コースシラバス	58

### 第3章 ジョーデンメソッド援用法+ ChatGPT による高校 / 大学英語教育

I ドリルのセッション	63
1. クラス外での準備 (予習)	63
(1) 常に複数形の名詞	63
(2) 単複同型の名詞	65
(3) 固有名詞と the	66
2. ドリルのセッションのアクティビティ	70
(1) クラスが始まる少し前	70
(2) ドリルのセッションの進め方	70
II 文法のセッション	80
III リーディングのセッション	83

IV	ライティングのセッション	88
	1. 単語、熟語、スベルチェック	88
	2. デイクテーション	89
	3. 日本語からの英訳	89
	4. メモ書き (宿題としても可)	89
	5. ショートメール (宿題としても可)	90
	6. 宿題としての小エッセイ	90
V	この英語の習得プログラムの評価法	91
	1. クイズ	91
	(1) 文法のクイズ	91
	(2) リスニングのクイズ	92
	(3) スピーキングのクイズ	93
	(4) リーディングのクイズ	93
	(5) ライティングのクイズ	94
	2. 中間・期末テストの行い方	94
	(1) スピーキングのテスト / オーラルテスト	94
	3. 生徒の側からの教師と英語のクラスに対する評価	100
	4. クラス見学でのクラスの評価のポイントと解説	102
	(1) 生徒のドリルのセッションの参加状況	102
	(2) 教師のクラスへの準備とクラスでの教師の状況	103
	(3) 授業の進行	104
	(4) アクティビティー	105
	(5) 訂正、フィードバック	106

## 付録

I	ChatGPT などを使っての教材の制作、クイズやテストの制作など	109
	1. 教科書の英文などを文字起こしする方法	109
	2. 単語リスト使用の英文パッセージ作り	109



3. PC, iPhone, iPad, Android で ChatGPT と英会話をする方法 ……	110
4. 英文を自然なものに書き換え可能 ……	112
5. クラス管理と暗記チェック、スピーキング/オーラルのクイズ、テスト について ……	113
6. Substitution Drill 作り ……	113
7. リーディング/リスニングのクイズ作り ……	114
8. ライティングのトピック作り ……	114
9. リーディングしてそれについてライティングするパターン ……	115
10. Utilization の英文の状況作り ……	115
11. 英語のスピーチのトピック作り ……	116
12. リアルな英語の音声作り ……	116
13. 単語クイズ作り ……	116
14. 文法のクイズ作り ……	117
15. リーディングのクイズ作り ……	118
<b>II その他の ChatGPT を使うプロンプト ……</b>	<b>119</b>
1. 英文のエッセイの添削をする ……	119
2. 扱う文法項目のあるセンテンス作り ……	119
3. 短文の4択問題作り ……	120
4. パッセージ4択穴埋め問題作り ……	122
5. 読解問題作り ……	123
6. 単語のリスト作り ……	124
7. 類似発音の練習問題作り ……	125
<b>III 単語リスト、文法項目 ……</b>	<b>126</b>
1. 小学校6年レベル単語リスト ……	126
2. 小学校での文法項目 ……	132
3. 中学校での文法項目 ……	132

4. 高校での文法項目	133
<b>IV CAN-DO リスト</b>	<b>134</b>
1. CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) : Conversation	134
2. ETS Oral Proficiency Testing Manual	136

# ジョーデンメソッドによる英語教育 with ChatGPT



## 第1章 言語プログラムの3要素と話技能の役割

### I 英語教育の3要素

言語プログラムのイロハは、

- イ) 目標：シラバス
- ロ) カリキュラム：その目標を達成するためのクラス活動・宿題など
- ハ) 評価：クイズ、テストで問題点を知ることによりカリキュラムをよりよいものにしていく

です。日本の英語教育では特にスピーキングスキルの評価が欠けていますが、言語教育では評価はカリキュラムの向上に非常に重要なのです。

### II スピーキングスキルは他のスキルを支えている

しかも、スピーキングは他のすべてのスキルを下支え、横支えをしています（『英語学習論 スピーキングと総合力』（青谷正妥）（朝倉書店））。以下に見るように一石四鳥なのです。文法理解も習得のための手段となり、より理解が進む＝習得作業がより効率的になるという関係になり、文法理解へのよいモチベーションとなりますので一石五鳥だとも言えます。従来型の「文法のための文法学習」では、やはり英語嫌いが出やすく、その分理解が進みにくいわけです。

#### 1. リスニングとスピーキングとの関係

リスニングはオーディオ機器を使ってもできますが、自らスピーキングをすることにより、そのスピーキングをした英語を聞くこととなりますので、リスニング力が向上します。

英語学習者がスピーキングをする時に発音やイントネーションに問題の出る英語は、そのリスニングにも限界があるものです。例えば、[ɪ]音や[r]音をきちんと仕分けして発音できない人は、リスニングで[ɪ]音と[r]音を聞いても曖昧音にしか聞こえない傾向があります。英米の映画やテレビドラマの英語はいわゆる“日常英会話”であり、英語の字幕でスクリプトを読めばやさしい英語を使っているシーンが多いと分かりますが、それをリスニングするとなると多くの英語学習者にとって非常に難しいものとなります。その理由は、その日常英会話を自らがしゃべれないからなのです。ですので、多くの通訳や通訳を目指して勉強している人達はリスニングにスピーキングを結びつけたシャドーイング（聞いた英語を少し遅れてそのままリピートすること）の方法を使っての練習を多く行います。

## 2. リーディングとスピーキングとの関係

日本の英語教育がリーディングにかなりのウェイトが置かれていても、リーディングの習得効率が非常に悪いのは音としての言語が前提に無いからなのです。オーラルの前提のあるリーディングは、語の塊である句や節単位で目に飛び込んで来ますのでリーディングが直読直解（本来の reading）で速くなります。そのベースの無いリーディングは、英文を語順通りに理解しないで、その語順を頭の中でひっくり返して読むといった、漢文の訓読のような遅いリーディング（decoding「解読」と呼びます）になりやすいのです。

言語は、意味を持った“音”がプライマリーであり、“文字”はその意味のある音を目に見える形にしたものにしすぎません。こういった事実は、第1言語である母語で考えてみれば明らかです。第1言語では、音としての母語から習得が起りますが、その音としての言語が存在しているという前提があってはじめて効率的にリーディングスキルの習得ができていきます。こういった習得関係であるためか、私達はリーディングを行っている場合も、その読んでい

る言葉が無意識に脳の中で音として響かせる傾向があります。文字表現の意味を“オーラルにたずねている”といった感じです（このことはライティングの場合も同様です。自分の書いた表現を脳の中で音として響かせて「その表現が自然に響くかどうか」を確かめることはよくあることです）。ですので、英語の習得もスピーキングが前提であればリーディング力がスムーズに伸びていくのです。

スピーキングによる支えがないと、語彙、文法、読解でいくら勉強しても読解力の伸びは頭打ちになりやすい訳です。実際、トップ大学合学者平均でも実用からまだ遠いと言われる英検2級レベルを出すことはありません（注）。入試でよくカバーされている英語会話も「読解」扱いです。そもそも、実生活で「会話を読む」機会はあるのだろうかと思います。「スピーキング」の練習も音読法がよく使われるといった、読み中心の発想の英語の扱いです。

## 注

スーパーグローバル大学トップ校の一つである京都大学が、新入生全員にTOEFL ITPを2016年の4月と12月に行いました。平均点は、

4月：503.1点
12月：505.8点
国際高等教育院報告

でした。英検準1級レベルはTOEFL ITP換算で550ですので、トップ大学であってもリーディング、リスニングに限ってさえ非常に低いという厳しい現状があります。

日本の学校での「嫌いな科目」調査では、英語科目は大体トップかトップあたりに来ます。近隣諸国では、英語を実用的に扱う習得教育で、「生きた」英語を扱い、学習の先に英語を実用的に使えることがある程度想像できるので、英

語学習への興味が刺激され、英語のリーディングとライティング、コミュニケーション能力が高くなります。日本の大学にはアジアからの留学生が多いのですが、日本語以外に英語でのコミュニケーションはおおむね流暢にでき、論文は英語で書いて提出ができます。

彼らが母国で経験した、使えることが前提の英語教育、英語学習はやはりより楽しいと思われ、逆に日本では、入試で扱う英語が典型ですが、英語を「死」語のラテン語のように語彙—文法—読解中心に扱っており、苦手な生徒、落ちこぼれの生徒が多い科目になるのは当然なのです。そして全国校長会が文科省に教科書の内容の削減を要請し続け、かなり語彙が少なくなっていました。他のアジアの近隣諸国でカバーする語彙数とは雲泥の差です。コミュニケーション英語はかなりカバーされてきていますが、習得前提でなく紹介型であれば「コミュニケーション英語」の読解となってしまいます。

小学校での英語教育が本格的に開始され、全体の導入語彙はかなり増えましたが、英語教育が他国のような習得教育へと脱皮のできていないままですので、落ちこぼれはさらに増えることが予想されます。

### 3. ライティングとスピーキングとの関係

正しい文型で、そして自然な英語表現にて英語で瞬時に言えるということは、ライティングをしても同様に正しい文型と自然な英語表現でスムーズに書けるということですので、ライティングの能力もスピーキング能力の向上と平行に伸びていきます。

TOEFL iBT には、スピーキングとライティングの両アクティブスキルのセクションがあります。結局高得点のために鍵となるのは、両セクションとも a) バリエーションのある自然な英語表現力と、b) バリエーションのあるセンテンスストラクチャーのパターンである文法力なのです。これら a) と b) を駆使して、スピーキングにてスムーズに言えるということは、ライティングでも a) と b) をスムー



ズに使えるということです。ですので、ライティングスキルの向上を指導する場合でも、スピーキングにてこれら a) と b) を生徒に習得してもらうことになります。そうすることによってスピーキングスキルのみならずライティングスキルもスムーズに伸ばすことができるからです。英語でのエッセイをいくら書いても、それだけではライティングの向上にはかなり限界があるものなのです。

#### 4. 文法とスピーキングとの関係

効率的なスピーキングの習得のためには文法を理解しなければなりませんので、文法の理解が物凄く深くなります。暗記や繰り返しドリルを行う場合、文法の理解のない英語のプラクティスはオウムの繰り返しになりやすく、直ぐに忘れやすく応用も利きません。ですので、成功している北米の日本語プログラムで日本語を履修している生徒は文法の説明をしっかりと読もうと試みるのです。つまり、文法のための文法ではなく、習得が目的の文法となりますので、“文法のための文法の勉強”法が作り出してきたと考えられる多数の文法嫌いの生徒を減らすことができます。

### III 教科書のスピーキングの扱い方

これほど重要なスピーキングスキルですが、英語の教科書を見ると、スピーキングスキル（ライティングのスキルもですが）を「習得型」で積み上げていくパターンにはあまりなっていません。副教材の教科書 workbook や教科書ガイドの類を使ったとしても、です。

- 1) 文法の理解
  - 2) スピーキングの練習
  - 3) どれだけ理解して使えるのかのチェックとしてのスピーキングのクイズ
- が、効率的にスピーキングのスキルを上げていくのに必要です。しかし、そう

いった仕様にはなっておらず、ただ英語のフレーズを聞いたりリピートしたりするパターンです。教科書に実際にある下の(1)のセンテンスの an apple ですが、どういう状況の an apple なんだろうと思わざるを得ません。apples ではないのか？(2)では複数形の pictures となっていますが。また、(3)の practice baseball に the がなく(4)の practice the guitar に the があるのはなぜだろう？後者は the はなくても可能なのか？(5)の clean the bathroom についでいる the はなんだろう？

- (1) I eat an apple.
- (2) Do you draw pictures?
- (3) Do you practice baseball?
- (4) Do you practice the guitar?
- (5) Do you clean the bathroom?

ここを生徒に理解させない限りいくらリピートさせても丸暗記ならぬ丸練習で、理解していない分忘れやすくなり、応用が利きにくくなり練習が非効率になります。なので、しかるべき文法の理解を深める「仕掛け」が必要です。

先生が文法を説明するとしても、先生によって説明の質に差があったり、説明の負担が大きかったり、先生が板書きするエネルギー、生徒がノートテイキングするエネルギーが習得に結びつくか甚だ疑問です。教科書から文法がかなり消えてしまっているのは、特にスピーキング、ライティングのスキルアップには相当まずいと思います。そこで、どうしても文法理解ベースのスピーキングスキルを徐々に積み上げる補助教材が必要になると思います。

クラス活動、クラス外活動（宿題など）で徐々にアドリブの英語で言えるように積み上げていく「仕掛け」が必須なのです。そして、その評価を行うことでどこにどういった問題があるのか、そしてそれらを具体的にどう克服していけばよいのかが見えてきます。

## 第2章 ジョーデンメソッド援用法+ ChatGPT による中学英語教育

### I クラス外での言語活動

習得型の英語教育への移行には、相応のティーチングメソッドとそのメソッドの使用を可能にする教材が必要です。つまりしっかりとした詳しいセンテンスパターンである文法の説明があり、その理解を前提とした豊富な量の練習ができる教材が必要です。実際問題として教科書がメインの教材として使われつつ中学と高校の英語教育が行われていますので、それをベースに「紹介」ではなく「習得」を目的に足りない部分を補うために補助教材を使ったり ChatGPT などの AI 援用で作ったりが必要になります。中学1年生の Lesson 1 をカバーする例を使って以下の 1.~3. を順に具体的にご紹介したいと思います。

#### 1. しっかりした文法の説明

クラス外でいかに文法を読んで理解させるか、その工夫が重要です。クラスでの文法セッションは、文法のクイック理解度クイズを行ったり、文法の説明の補足をする時間として使います。下の 2 と 3. ではその「理解」が伴わないと、練習・暗記が空回りします。

#### 2. 英語会話の練習・暗記

口頭での暗記もできなくて、実際の英会話機能が機能することはあり得ません。音声データがない場合、リアルな音声を AI で作り、扱いやすい変速機能のついたものを使って効果的に練習できる体制にしておきます。

#### 3. サブスティチューションドリル (Audio-Lingual Method)

この制作には、ChatGPT を援用します（実際のサブステイションドリルはこの章の I-3. を、その制作方法は付録 I-6. を参照）。

### 注

公立の中学校では英語科目は週 4 時限が普通ですが、中高一貫校では週に 6、7 時限が普通です。そのため、検定教科書では進むスピードが遅いので、進むスピードのより速い『New Treasure』などをメインの教科書として多くの学校が使っています。文法ベースの副教材もありますが、練習は語彙挿入、語句の並び替え問題、センテンスの英訳問題の範囲までで、スピーキングスキル習得に向けた練習はまったく欠けてしまっています。トップ大学合格者でさえ、多くがカタカナ・カタコト英語だと揶揄され続けているのには理由がある訳です。

いまの中学 1 年の教科書では、英語教科が小学校 5、6 年に降りているからだと思いますが、Lesson 1 で SVC と SVO が同時にカバーされています。SVC 型のシェアは 65% 近くで SVO 型のシェアが約 20% です（『即戦力がつく英文法』（日向清人）（DHC））、Lesson 1 は基本文型の土台作りとして、時間をかけてじっくり理解、練習、暗記、繰り返しの学習を行います。

小学校 5、6 年ですでに導入されている語彙は最初からカバーしてよいと思いますので、「理解、練習、暗記、繰り返し」学習の中にそれらを加えることは可能ですが、中学 1 年の教科書で後の Lesson でカバーされる文法項目は避けた方が無難です。習得型で習熟度を徐々に上げるタイプの英語教育の場合、カバーする文法項目が多いと中途半端になりやすいからです（ちなみに中学 1 年でカバーされる文法項目のほとんどは小学校 5、6 年で導入されていますが、小学校での英語教育では生徒たちの文法の理解はあまり考慮に入れられていません）。

基本英会話は教科書のもを使います。中学 1 年の教科書の Lesson 1 の英会話は大体以下のレベルのものになります。